
五目ごはん

なまはげ秋田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五目ごはん

【Nコード】

N7726Y

【作者名】

なまはげ秋田

【あらすじ】

色々な原作がごちゃ混ぜの短編集。気の向くまま、筆の向くままの更新となります。

白い塔 幻想水滸伝？

ルックが逝った。

全てを憎み、紋章を憎んだあの子は、世界を壊したかったのだろうか。

私の目は、あの子が空を流れ、あの子を慕った少女と共に去る姿を見ることは叶わない。

- - - - -

塔の窓から空を見るレックナートは一段と高く顎を持ち上げた。白いフードが肩に流れ落ちて黒い髪がさらさらと風に舞う。

窓から身を乗り出し夜の空へと身を乗り出すその姿は、手元に置いた可愛い弟子を送る師匠としてか、

二人の幼い子供を慈しみ、育てた母性がそうさせるのか。風がふわりと塔を包み込んだ。

身を乗り出したレックナートの黒い髪が巻き上がり、夜の闇と同化する。

「最後に会いに来てくれたの？」

見えない流れ星に声を掛けながら手を伸ばした瞬間、背後から身を乗り出すレックナートの腰を抱く影。

「死にたいのか？ 執行者は。」

冷たい声に返事をするかの様にレックナートの手は握りこぶしを作った。

「ユーバー……。」

「死にたいのなら、このまま突き落としてやろう。」

白い背中の後ろで残忍な笑みを浮かべる八房の紋章。破壊と混乱を何より好む存在。

「貴方、あの子に手を貸したの……？」

「知っている事を何故聞く。」

虚空を握る手を掴み楽しそうにユーバーは言葉を続ける。

「憎悪の対象が欲しいのか、レックナート。」

「今更貴方を憎んでも、あの子達は帰ってこない。」

遠い空の星の様な小さな声が悲しみに瞬く。

「紋章も行方知れずか。お前が探す紋章と同じだな。」

- - - - -

昔、一人の女性が門を開いた。

数多の魔族がその門から飛び出し、もう一人の女性が慌てて門を閉ざそうとした。

その瞬間、魔族の声が裏の門の力を行使しようとした女性を捕らえた。

「女、門を閉ざすか？」

「当然だわ！貴方達は自分達の世界で生きるべきでしょう！」

「我は青い世界から人間の世界へ出でる。お前の守る門を破壊する事などたやすい。」

魔族は嘘をつく。だが、今の言葉は嘘ではない。

レックナートは門をくぐり、魔族の青い世界へ入り込んだ。

「内側から門を閉めれば、例えば表の紋章を使っても門は開く事は無いわ。」

愉しそうに笑いながら魔物は言った。

「いい度胸をしている。お前に免じて俺で最後にしてやろう。」
人間界に出るつもりだ。レックナートは門を閉じようとした。

魔物はそれより早くレックナートの顔を両手で挟み、端正な顔で呟いた。

「黒い髪に青い瞳か。この世界の象徴の様な色だな。」

青い目が大きく見開かれ、言葉を口にしようとするレックナートの口を大きな手が塞いだ。

レックナートは両手で相手を押しやろうとするが、魔族はぴくりとも動かない。

「他人に見せるのは勿体無い、その青は。」
もう一方の手が視界に迫る。その手を払おうと白い手が勢い良く持ち上げられた。

口を塞いでいた手が空中で手首を掴み、魔族は静かに言った。

「だから俺が貰っておこう、レックナート。」
手が視界を覆うと同時に、目も光を失った。

顔の上半分を手で覆われ、視力を奪われたレックナートはそれでも言い募った。

「私はいつか必ず門を閉める。」

「内ですか？外ですか？」

「わかつているのでしょうか？答える必要はないわ。」

門の紋章は二つ揃っていてこそ、真の力を発揮する。
今は両方揃っていても、この魔族に対抗できる力が不足している。
並び立つ程に力をつけたら、その時は門の内側から閉ざす。

紋章ごと魔族に喰らわれるが、もう門は開く事は無い。

人間の世界に出た魔族も減ることはあっても増える事はなくなる。

「その時は俺もつきあってやろう。」

言いながら魔族は覆っていた手をレックナートの顔から離れた。
黒髪が覆う顔。そして瞼は閉じられていた。

魔族は白いローブが覆う肩を抱き、人間の世界へと誘う。

門をくぐると同時にレックナートは門を閉じた。

「また会おう。」

「魔族となんかもう会わない。」

「クーバーだ。」

「え？」

「俺はクーバーだ、レックナート。」

そう言い残し、ユーバーはいずこへと去っていった。

「此処で身体を癒す。」

癒えた後、白い塔から離れるユーバーは窓辺からレックナートを引き離れた。

「貴方も無傷という訳にはいかなかった。」

返事をするレックナートはユーバーに肩を抱かれ、背中を向いた。それでも白い顔は夜空を向いている。

「執行者は秩序に偏っている。これで丁度いいだろう。」

夜空の様な黒い頭を大きな手が抱え込み、強引に顔を窓から正面へと移動させる。

泣く事が出来ないレックナートは眉をひそめて何も言わない。

二人は大きなソファアールへと静かに歩き出した。

「表は今だ行方不明か。」

「時がまだ満ちてはいないのでしょう。」

「見つけたらどうする？」

「知っている事を何故聞くの？」

ユーバーは立ち止まり黒い頭を自分の胸に押し付けた。

さらさらと髪が流れ、白い肩が震えた。

「さつさと俺を閉じ込める。」

「難しい事を簡単に言わないで、ユーバー。」

悲しみに震える声が非難の言葉を呟いた。

流れた星は風と去り、今は無数の小さな星が夜空に煌めく。
その星明りはぼろぼろと白い塔に零れ落ちた。

白い塔 〓 幻想水滸伝?〓 (後書き)

初出 2010/12/04

劍魔のキモチ 〱 悪魔城ドラキュラX 月下の夜想曲〱

夜の色は紫黒。その空に浮かぶ銀の月。

月が照らすのは年月を重ねた古城だ。人間はその城を「悪魔城」と呼ぶ。

城内は窓からの月光と燭台の光に晒され、刺繍がされた赤い絨毯、扉やその取っ手、更に窓枠にまで施された華やかな装飾が城内を煌びやかに飾っている。

そんな城の中を進む一人の青年がいた。

父親譲りの髪の色は、今宵の夜空を支配している月と同じ色をしていた。

走る青年の漆黒のマントは空を切り裂き、漆黒の上で踊る銀の髪が軌跡を描き、長靴は音も立てずに赤い絨毯の上を滑る。

その青年の瞳の色は時折この城を覆う霧のような灰色。

- - - - -

石壁が覆う部屋で、我は長きに渡りまどろんでいる。

だが、少し前より城内に今まで無かった気配と足音を感じる。

雑多で猥雑な人間の赤い血の奥に潜むのは城主と同じ青い気配。

まさにこの夜空の如く赤と青の混ざった者。深遠の眠りより目覚めたる者。

アレか

城主が自分の血統を残さんが為に数多の種族と交わったが、全て徒勞に終わった。

交わった末に生まれ出でた存在達。奴等は継いだ魔力に耐え切れず、ある者は精神が壊れ、またある者は身体が破壊し、そして両方

が粉々に砕けた者もいた。

唯一残ったのが、アレという話は本当であったか。

昼と夜のあわいの子、逢う魔が時の貴公子、それは貴族と呼ばれる吸血鬼でも人間でもない存在。

己が滅びを予感しての事なのか、単なる実験なのか。様々な憶測が流れたが、伯爵が何故暴挙と噂された行動に打って出たのか。その理由はあやつしか知らぬ事だ。

石畳の上を覆う赤い絨毯が吸い込んだ足音が少しずつ我の方へと近づいて来る。

アレが持つ青い気配は、若い頃の伯爵と瓜二つか。ふむ、完璧にあやつこの魔力を受け継いでいる。

遠い昔に一度だけ我を手にしたあやつ、この城の城主ドラキュラ伯爵とな。

我は揺れる思考と共に扉が開く音を聞いた。

闇の中で我を見るは一人の青年。姿形も若い頃の伯爵にそっくりではないか。

面白いと思いつながら我はその者に名を問うた。

「アルカード」

どこか芳醇な葡萄酒を思い起こさせる低い声にも魔力が溢れている。無意識でこれ程の力となれば、故意に魅了を込めれば、それは、抗いがたき魅惑となるであろう。

もっともこの青年はそんな事は意識の外に放り投げているようだが。

無表情のままどんどん近づき、そして躊躇いもせず我に手をかざす。

面白い、アルカード

「何が？」

踵を翻した先の扉の前で、我の呟きに反応して立ち止まったあやつ
の息子は逆に問うてきた。

アルカード、お前の目的が何かは知らぬし、それはどうでもいい事。
だが、お前の父より齢を重ねた我を手取る資格があるかどうかを
試したくなつたと我は答える。

「どうやって試す？」

そんなの我が勝手にする事だから捨て置け。まったく口数の少ない
男よの。会話が短すぎてつまらんど

「剣魔、貴公の名を教えて欲しい。」

驚いた。我を初めて手にした男と同じ事を言う。ドラキュラ伯爵も
聞かなかつた事をアルカード、お前が聞くか。

インテリジェンスソード

我が名を聞いたアルカードは小さく笑い、再び走り始めた。我はあ
やつの子の側を漂い、小煩い輩を屠りながら名を与えた男を見極
める。

光と影を併せ持つ、黄昏時の落し子たるアルカードにその資格有り
と認めたらば、我は剣魔ではなく剣となりてその手に収まるであ
ろう。

我は百なる一の剣。剣魔であり一振りの剣たる我を人はインテリジ
ェンスソードと呼ぶ。

- - - - -

シューウウウ

闇が吐く吐息の様な音を立てながらインテリジェンスソードはアルカードの側をふわふわと漂い、そして魔を消し去る。

敵対した者達の断末魔の叫び、剣と剣がぶつかり合う金属音、投げられた武器が壁や床にぶつかる音、鎧や彫刻品あるいは壺ががなりたてる破壊音。

悪魔城で奏でられたそれら音の全ては、月下で夜想曲となる。

コウモリの気持ち　　～悪魔城ドラキュラX　月下の夜想曲～

一人の青年が月下に聳え立つ城の廊下を失踪している。
彼の頭上には使い魔のコウモリが付き従って飛んでいた。
コウモリは黒い目で青年と同じ方向を見つつ、薄い皮膜の翼をはためかす。その黒い翼の内側は通常のコウモリとは異なり、赤い色をしていた。

走っていた足を止めて、青年アルカードはその場に立ち止まり、何事か考え込む様に灰色の両眼でじっと前を見据えた。
頭上のコウモリも同じく空中で静止した。

「アル様、どうしたのかな？」

「何考えてるのかな、アル様。」

コウモリ達は心配そうに銀色の頭の上を舞っていた。

そうして立っているアルカードにこの悪魔城に住まう異形の者が密かに近づく。

「！」

気付いたコウモリ達はピコーンと反応するやいなや、敵と認定したその異形の者へ体当たりをブチかました。

コウモリは自分達が非力である事を重々承知していた。だから、我が身に構わず何度も何度も敵に体当たりをする。

「私のアル様に近付くな、このケダモノ！」

「アタシのアル様が穢れるっつーの！」

「僕のアル様だから！」

「お前ら、俺のアル様に決まっただよ！」

わあわあと超音波で喚きながら休まずに敵に向かうコウモリ達。

息つく間もなく連続で攻撃された敵は床に崩れて、そして消滅した。

得意満面のコウモリ達が「えっへん！」といった表情で帰って来る。そしてアルカードの周りをはたはたと飛ぶ。本当は「アル様、褒めて！褒めて！」と言いたいのだが、とてもじゃないが言えないコウモリ達は灰色の視界の中を飛び交い精一杯のアピールをするのだ。アルカードは苦笑すると左手で握り拳を作り、その手の甲を自分の唇に当てた。

「アル様、笑った！素敵！」

己が主の微笑を数百年ぶりに見たコウモリ達は大興奮で、翼を倍の速度で動かしながら一層速度を増して忙しなく飛び回る。

アルカードは小さな笑顔のまま、左手の拳を開き、自分の右肩をぽんぽんと叩いた。

「アル様ああああー！！！！！」

コウモリ達はハートマークを撒き散らしながらアルカードの肩や頭上へ鳥のように止まった。そうして主より分け与えられた魔力を己に補充する。

使い魔にとって主の魔力は何よりのご褒美である。特にアルカードは、魔族の中でも上位で俗に貴族と呼ばれる吸血鬼、その頂点に君臨するドラキュラ伯爵を父に持つ。当然魔力も父親譲りだ。その青い魔力を「極上の葡萄酒でさえ足元にも遠く及ばず」と称したのは蔵書庫に住まう業突く張りの老人だ。

一時が過ぎ去った後、アルカードは視線を頭上へと移した。コウモリ達は再び空中へと戻り、黒い目はアルカードの灰色の両眼が別の色に変化するのを見た。

ドラキュラ伯爵の息子の身体を駆け巡っていた、或いは彼が意識的に潜めていた魔力が怒涛の勢いで両眼へ向かう。

結果、アルカードの両眼は一对のルビーとなった。貴族の証でもあ

る赤い色は、普段は断片的にしか魔力を使わないアルカードが、ある一定の時間内に途切れる事無く連続して魔力を行使してる間、現われる。頂点に立つ者と同じ血塗られた赤い宝玉に、コウモリ達は暫し酔い痴れる。

青い魔力が赤い瞳と漆黒の装いをしたアルカードを覆い、次の瞬間、アルカードは巨大なコウモリとなり空中で静止していた。

全身は艶を纏った漆黒で、華麗な翼の内側は鮮血で塗り固められたような赤。その赤の表面を魔力が見えない陣を描きながら駆け巡るコウモリ達の歓喜に打ち震える口が喘ぐように呟いた。

「我が主……！」

コウモリ達の目を恍惚が支配して、それはつるりとした黒瑪瑙となる。そして黒瑪瑙に映り込むのは巨大なコウモリだ。使い魔たるコウモリ達はその姿を見るのは何百年ぶりかの事であり、魔力や歓喜で輝くその目に少しでも長く己が主の優美な姿を焼き付けようとしていた。

黒瑪瑙の中の巨大なコウモリが静かに翼を動かし、乱気流を巻き起こす。魔力が混ざった空気の中で飛ばされまいとコウモリ達はばたばたと翼を動かして必死で付いていった。

飛翔するアルカードが空中で静止する。その先には、空に浮かんだこの城の住人が弓を引き絞ろうとしていた。

アルカードが口を開き、優美な曲線を描く巨大な犬歯が剥き出しとなる。その色は何人たりとも穢す事を許さない純白であった。

キィーーン

とてつもなく高い音域から発せられる金切音と同時に開いた口の中に紅蓮の炎が現われる。

炎の塊はどんどん大きくなって、アルカードの吐く息と共に口外から、そして敵と見做したこの城の住人へと轟音と共に燃え盛りながら向かって行った。

「我が主に近付くな！」

「我が主に弓引くなどと、卑しい輩が！」

「下賤はさつさと地に落ちろ！」

「主に逆らうなど、百万年早いわ！」

コウモリ達も呪詛の言葉と同時にアルカードのよりは小さい炎を吐き出した。

- - - - -

アルカードは元の姿となり、城の最深部へと向かう。その頭上をコウモリが付き従う。

月光の下で、静かなる喧騒は夜想曲の一小節となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7726y/>

五目ごはん

2011年11月25日23時53分発行